

同性愛は

「病気」なの？

僕たちを振り分けた世界の
「同性愛診断法」クロニクル

牧村朝子

LGBT新書のパイオニアにして
金字塔、『百合のリアル』の
著者最新作

診断され、
治療された

同性愛 の歴史。

✓ 「同性愛は異常」という常識に
立ち向かった伝説の心理学者

✓ 同性愛は人工男性器の
埋め込みで治る？

✓ ナチスの強制収容所で使われた
「ピンクトライアングル」の意味

同性愛は「病氣」なの？

僕たちを振り分けた世界の「同性愛診断法」クロニクル

牧村朝子

星海社

76



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

「私は、同性愛者なんですか？」

こんなご相談を受けるたび、考え込んでしまいます。

人を好きになって、「私は異性愛者なのだろうか」と悩む人はなかなか少ない。なのに、その相手が同性であつたというだけで、どうしても人はこんなにも戸惑ってしまうのかしら、
って……。

ご挨拶が遅くなりました。私は、文筆家の牧村朝子まきむらあさこといひます。編集者であるフランス人女性と、同性婚が法制化されたフランスで結婚しています。

デビュー作がセクシュアリティ論の入門書『百合のリアル』（星海社新書、二〇一三年）だつたこともあつてか、私のもとは、お手紙・メール・スカイプなど毎月数十件のご相談をお寄

せいただいています。そうしたご相談の数々に、二年間、延べ四百件近くに耳を傾けてきて、つくづく感じていることが、これなんです。

「なぜ『異性愛診断テスト』はないのに、

『同性愛診断テスト』は必要とされ続けるんだろう？」

人を好きになったとき、その喜びを感じる間もなく「自分は同性愛者なのだろうか」と悩んでしまう。

人に想いを告げたくても、「あなたって同性愛者だったんだ」と言われるのが恐くて、ひとりで気持ちを押し殺してしまう。

そんなケースに直面するたびに、私は無力感にさいなまれました。

ああ、これ、十歳の時の自分と同じだ。自分が女の子に初恋をしたあの日の、「自分が自分でなくなってしまうような感じ」に、今も苦しんでいる人があるんだ、って……。

そこで私は、こんなタイトルの記事を書きました。

「世界の同性愛診断法」画像から医学テストまで」

二〇一三年当時から連載させていただいている、株式会社DMM.comによるLGBTコミュニティサイト「2CHOP」で、世界のいろいろな「同性愛診断」（と称されるもの）についての紹介を読み物記事にまとめたのです。

この記事を書くためのリサーチがまた、驚きの連続でした。国家として同性愛診断法を開発しようとする国、迫害された同性愛者に「もっとオネエっぽくすべきだよ」とアドバイスする弁護士。記事を書き終えたあとも私は、世界の同性愛診断テストについて調べることをやめられませんでした。

その結果立ち現れてきたのは、そもそも「同性愛者」という言葉自体がかつては存在しなかった、という事実でした。そして、そんな時代に「同性愛者」という言葉をつくりだし、数々の同性愛診断法を考えだしてきた、それぞれの人々の、それぞれの人生でした。

こうした人々の生きた軌跡を知るとは、「どうすればそれぞれ違った人間が同じ社会で一緒に暮らせるか」という答えを探すことにもつながります。私はこの本で、「異性愛者はこんなにひどい同性愛者差別をしてきた！」みたいなことを叫ぶつもりはありません。「同性愛者は他と違ってこんなに特別！」みたいな話がしたいのでもありません。この本は、特に同性愛者向けでも非同性愛者向けでもありません。むしろ、同性愛者とか異性愛者とかいう言葉に切り分けられながらもそれぞれ生きている「人間」たちの物語を、あなたとひもといていきたいのです。

長い間、いわゆる同性愛者と呼ばれる人たちの多くは「みんなと同じだというフリ」をして生き抜いてきました。自分の中の「みんなと違う」部分を押し殺し、あるいは死ぬまで隠して。だけれども、そうした人々を「みんなと違う」とみなしてあぶり出そうとした人がいるのです。また、「もう隠すのはやめよう。私たちはみんなと違うんだ」と呼びかけた人だっているのです。そうして、ひとりとして同じではない人間たちが、「誰かと『同じ仲間』でありたい」あるいは『違うやつら』を排除して安心したい」という想いで何をしてきたかという歴史を、その過程で考え出された実際の同性愛診断法とともに見ていきま

しよう。

第1章では、まず「同性愛者」という言葉ができるまでの過程をお話します。続く第2章では、同性愛の理由を探した人々のこと、そして、「我々同性愛者は科学的に言って他の人間とは違うんだ!」と立ち上がったある医師の物語をご紹介します。こうして「同性愛者」という存在が社会で存在感を高める中、二度の世界大戦が起こり、ナチスドイツや米軍などが同性愛診断に乗り出した頃のことを第3章でみていきます。そして「同性愛治療」と称した恐ろしい行為が行われ、人種という考え方にとらわれた人々が殺し合い、戦火が街を焼きつくしていったあと、「本当に『同性愛者』ってというのは人種のようなものなんだろうか?」と考え直した人々の姿を第4章で描いていきます。最後の章となる第5章では、現代のこと——国家レベルで、難民審査の場で、あるいはネットのデマとして今もつづられ続ける同性愛診断法の実例をみていきます。それらを踏まえた上で改めて、「人は『同性愛者』と『非・同性愛者』に分けられるのか?」ということを一緒に考えていきましょう。

なお、本書で言う「同性愛者」とは、「同性だけを愛する者」の意味に限らず、「同性を愛することもある者」くらいの意味で使っているということを先に申し上げておきますね。

つまりは、男性とも女性とも恋愛の可能性がある両性愛者（バイセクシュアル）、基本的に異性愛者だが同性との恋愛にも抵抗はないヘテロフレキシブル、男も女もどちらでもない人も性別に関係なくあらゆる人との恋愛の可能性がある全性愛者（パンセクシュアル）などといった人々のことも「同性愛者」という言葉で総称しています。これは、私がバイセクシュアルなどの多様な自認を持つ皆さんのことを「要は同性愛者でしょ？」扱いしたいからではありません。そうではなくて、この本で振り返る時代の半分以上、具体的に言うところ第二次世界大戦前くらいまでは実際にそのような言葉の使い方がなされていたことを考慮してのことです。「人はそれぞれ違うよね」という、当たり前といえど当たり前のことが広まり、性のあり方を示す言葉も「バイセクシュアル」「パンセクシュアル」などと細分化しはじめたような風潮は、ごく最近のことですからね。また、そんな現代にあっても、本当にさまざまなあり方の人々が「要は同性愛者でしょ？」の一言で片づけられてしまうことは残念ながらまだ珍しくありません。

……ということで、ご挨拶と、この本の流れ、この本が同性愛者向けでも非同性愛者向けでもないということ、それから、「同性愛者」という言葉をこの本の大部分では「同性を

愛することもある者」くらいの意味で使っていますよっていうお話をさせていただきました。

「同性愛診断法」の文字が並ぶこの本を、あなたはどんな想いで手に取ってくださいましたのでしょうか。いまパソコンの画面に向かって書いている私からはわかりません。けれども、同性愛診断法の実例と、その裏に隠された人々の物語を通して、あなたがよりよく生きるヒントを見つけるお手伝いができたならいいなと思って、私はこうしてあなたに書いています。

それでは、さっそく本題に入りましょう。

目次

はじめに 3

第1章

「同性愛者」という言葉がでるまで (1868)

15

「実は、僕もゲイなんだ！」 17

同じ同性愛者どうしというけれど…… 20

「同性愛者」以外の分類いろいろ 26

ある、男を愛した男の死 36

「同性愛者」というカテゴリーの誕生 45

第2章

「犯罪」とされた同性愛（-1871） 51

同性愛の理由を「からだ」に探す 53

✓ 診断法 1 ブームにかき消された「同性愛者は脳で見分けられる説」 59

✓ 診断法 2 人体実験にまでエスカレート、「同性愛者は精巣で見分けられる説」 59

✓ 診断法 3 「同性愛者は直腸で見分けられる説」 63

同性愛の理由を「こころ」に探す 66

同性愛が「第三の性」とされるまで 71

✓ 診断法 4 「同性愛者はお尻で見分けられる説」 75

✓ 診断法 5 「レズビアンは精子を、ゲイは生理の血を出すのでは説」 76

第3章

戦火の中の同性愛（1938-） 81

ナチスの台頭と同性愛迫害 84

✓ 診断法 6 「同性愛者」少子化につながる「国家の敵説」 88

ナチスの「同性愛治療」——ブッシェンヴァルト強制収容所の悪夢 92

✓ 診断法 7 「男性同性愛者は男性ホルモン値で見分けられる説」 92

米軍式、同性愛「診断」法 101

✓ 診断法 8 「男性を脱がせたら同性愛者だけ恥ずかしがるのでは説」 102

✓ 診断法 9 「男性同士でオナニーについて話し合わせたら同性愛者だけ恥ずかしがるのでは説」 103

✓ 診断法 10 「口の中に「同性愛者発見器」を入れれば分かるのでは説」 104

✓ 診断法 11 「同性愛者はおしつこで見分けられるのでは説」 109

日本は同性愛をどう見ていたか？ 110

同性愛は「人種」なのか (1945-) 119

✓ 診断法 12 「診断法じゃないのに診断法扱い、キンゼイ・スケール」 125

「人間は同性愛者と異性愛者に分かれる」説に対する、「両性愛者（バイセクシュアル）の戦い」 129

第5章

現代社会と同性愛（-2015）

163

現代も同性愛を「犯罪」「病気」とみなす地域

165

“ネタ”としての同性愛診断法

168

✓ 診断法 19 「本当は〇〇の診断法なのに……日本のネットで広まったデマ」

168

✓ 診断法 13 「性のあり方をセルフチェックできる、クライン性的指向グリッド（KSOG）」

132

同性愛が心の病気とされていたころの診断法いろいろ

135

✓ 診断法 14 「四五五問のクイズで同性愛チェック！ ターマン・マイルズ・テスト」

137

✓ 診断法 15 「単語知識ではかる、スレイター選択的ボキャブラリーテスト」

141

✓ 診断法 16 「なんと日本の公務員試験でも!? ミネソタ多面人格目録」

144

✓ 診断法 17 「異性愛者は〇〇しがち、お人形さんテスト」

148

✓ 診断法 18 「こじつけか、それとも……? ロールシャッハテスト」

149

同性愛が犯罪でも病気でもなくなった日

154

✓ 診断法 20 「アメリカの男子生徒たちが授業中に試した『ゲイ・テスト』とは」
繰り返す歴史、国家レベルでの同性愛診断法 172 170

✓ 診断法 21 「同性婚式出席者に、エジプト警察が同性愛法を強制」 173

✓ 診断法 22 「同性愛診断テストを理由に、ワールドカップをボイコット？」 175

✓ 診断法 23 「ピンクの証明書——トルコの軍隊による同性愛者排除」 177

母国を追われる「LGBTs 難民」 179

✓ 診断法 24 「チエコ五十年の歴史、ファロメトリック・テスト」 180

✓ 診断法 25 「女装してないならゲイじゃない？ 難民に向けられる偏見の目」 183

✓ 診断法 26 「子どもを産んだらレズビアンじゃない？ 弁護士が発言が物議を醸す」 185

人は「同性愛者」と「非・同性愛者」に分けられるのか？ 187

おわりに 192

参考文献一覧 201

第 1 章

「同性愛者」
という言葉が
できるまで

(-1868)

同性愛診断法、というものについて考えていくには、まずそもそもなぜ「同性愛者」という区別が生まれたのかを考える必要があります。

といってもこれは、「同性愛の原因」みたいなお話をしているわけではありません。同性愛の原因については今まで、医学・遺伝子学・動物行動学・社会学などあらゆる学問分野で研究されてきましたが、「これが原因です！」とすべてを語りつくした論文はひとつも出てきていないという状況です。おそらく、今後も出てこないでしょう。なぜなら、「同性愛の原因」を考えるという態度は、しばしば「同性愛者は同性愛者でない人とは客観的に区別できる」という前提の上に成り立っており、この一歩手前の問いを置き去りにしたままの態度だからです。

「なぜ人間は『同性愛者／異性愛者』などという区別をするようになったんだろう？」

そういうことで、第1章では、さっそくこの「一歩手前の問い」について考えてみるこ

とにしましょうか。まず、同性愛者／異性愛者という区別が当たり前ではないことを示す実例や、「同性愛者」という表現が定着する前に考え出された分類の数々をご紹介します。ききます。その上で、同性愛者という言葉が生まれるまで——どういう人々のどういう願いがあつて、どういった社会的状況の中で同性愛者というものの見方が生まれたのかに迫っていきます。

まずは身近なところから、こんな経験をお話します。

「実は、僕もゲイなんだ！」

空港からパリに向かうタクシーで、彼は嬉しそうにそう言いました。

フィンランドからのバックパッカーだという彼は、白金の髪に氷のような碧眼^{へきがん}。なんだかスーパースายヤ人コスプレが素^すで似合いそうなくらいの、頼もしい体つきをしています。タクシーの後部座席に並んで座つても、その圧倒的な身長差は明らかでした。黒髪に黒い目の日本人女性の私とは、お互い人間だということくらいしか共通点がないように見えます。だけでも彼は、私に向かつてこう言ったのです。

「仲間を見つけたみたいで嬉しいなあ」

それは彼と私が、ゲイとレズビアン、同じ同性愛者同士の仲間だということのようでした。ストライキでバスも鉄道もちつとも来ない空港で、「誰か一緒に割り勘でタクシーに乗りませんか！」と叫んだ彼に、唯一「そうしましょう」とついていったのが私だったから、というわけではなくて。

ちなみに、私は「私はレズビアンです」とか「私は同性愛者です」だなんて一言も言っていないませんでした。ただ、なぜフランスに来たのか聞かれて、「フランス人の妻と住んでいるからです。日本の法律では同性同士で結婚できないので、フランスで結婚して暮らしています」と答えただけです。それだけで、彼は私を仲間と呼んだのです。心のガバツと開く音が聞こえてきそうなくらいの、とっても嬉しそうな笑顔で。たぶん、鎖国時代の隠れキリシタンが別のキリシタンを見つけた時って、ああいう顔をしたもんなだろうなあ、って思いました。

さて、この「仲間を見つけたみたいで嬉しいなあ」というやりとりですけど、不思議なことに同性愛者同士の間では交わされないものですね。たとえば同性愛者同士、両性愛

者同士の間などならまだ想像はつきますけれど、異性愛者同士でのこういうやりとりってあまり想像がつきません。

「実は私、異性愛者なんです」

「そうですか！ 実は僕も異性愛者なんですよ！ 仲間を見つけたみたいで嬉しいなあ」

……どうでしょうか。おそらく、こういう会話を耳にした経験のある人は非常に少ないでしょう。私も聞いたことはありませんが。

先のタクシーでの会話も、もしスーパーサイヤ人な彼が異性愛者だったとしたら、

「私はフランス人男性と結婚してフランスに来たんです」

「そうですか！ 実は僕も異性愛者なんですよ！ 仲間を見つけたみたいで嬉しいなあ」

だなんて会話にはなっていないかったですよね。

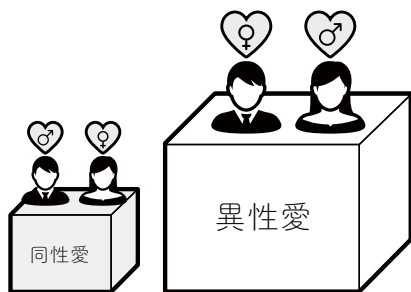
それもそのはず。自分を異性愛者だと思っている人は、他の異性愛者に別段仲間意識を持たないどころか、そもそも「実は異性愛者なんです」だなんてことすら口にするのもあまりないからです。

別に、それが良いとか悪いとかいう話ではありません。私はここでは特に、「異性愛者はずるい!」とか「仲間意識を持てるのは同性愛者ならではの喜び……」とかそういうことを主張しているのではないのです。そうではなくて、その「同性愛」というくくりがなぜ生まれたのか、ひいてはこの「同じ仲間同士」という仲間意識が、なぜ同性愛者にあつて異性愛者にはあまりないのかという話をしているのです。

同じ同性愛者どうしというけれど……

ということ、この仲間意識の源をさぐってみましょう。おそらくこの仲間意識というのは、こういうイメージにもとづくものではないでしょうか。

世の中は男と女、同性愛者と異性愛者に分かれている。そ

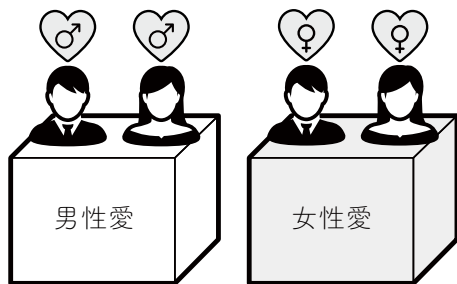


して、同性愛男性と同性愛女性というのは比較的数が少ないが、異性愛男性と異性愛女性
はあちらこちらにいる——と。

もちろん、これはものすごく単純化した図です。たとえば「他者を恋愛・性欲の対象と
しない」という人や、「自分を男性だとも女性だとも思っておらず、よって自分にとっては
『同性』である人も『異性』である人も厳密にはいない」と考
える人だっていますよね。ただ大まかな分類として、「男と
女」のふたつがあると考える男女二元論や、「同性愛と異性
愛」の二項対立を前提にすれば、このような「同性愛者は比
較的少なくて珍しい」というイメージが浮かんでくるわけ
です。

だけでも、たとえばこういう考え方ではどうでしょうか。

世の中には、男性を恋愛対象とする人間と、女性を恋愛対
象とする人間がいる。前者は「男性愛者」、後者は「女性愛



者」である。つまり、たとえば、いわゆるゲイ男性と異性愛女性は、言ってみればどちらも「男性愛者」なのだ——と。

繰り返しますが、これらの図が世の中のすべてを表しているわけではありません。図Aと図Bは、あくまで、男もしくは女と恋愛する人たちについて整理したものです。つまりは同じ対象を違う方法で分類し直しているわけですが、それぞれの分類は次の二点において大きく異なっています。

①「同性愛／異性愛」は本人の性別を起点に考えている。

「男性愛／女性愛」は本人の性別に関係がない。

②「同性愛／異性愛」では、同性愛の方が少ないようにイメージされる。

「男性愛／女性愛」では、だいたい同じくらいの数になることがイメージされる。

なお、これら「男性愛者／女性愛者」という概念は、主に英語圏において、複数の書籍や論文で実際に使われているものです¹⁾。日本語の文献はまだまだ少ないですが、英語では次のように呼ばれています。

男性愛者……Androsexual (アンドロセクシュアル)

女性愛者……Gynosexual (ジノセクシュアル)

冒頭でお話したタクシーでのことも、この見方に基づいていれば展開が違っていたでしょう。ゲイを名乗る男性の彼と、女性と結婚した女性の私とは、それぞれ違う男性愛者と女性愛者だということになります。彼は私を「自分と同じ同性愛者だ」とは認識せず、よって「仲間を見つけたみたいで嬉しいなあ」なんてキラッキラの笑顔を向けてくることもなかったのでしょうか。

本来、人間は、ひとりひとり違います。だからこそ、なにかしらの共通点を探し、「同じ

仲間」だと認識するための名前をつけるわけです。そうして「自分と同じ仲間」が誰なのかという線を引くことによって、必然的に「自分と違うやつら」の存在も立ち現れてきます。

だけれどもその線というのは、もともと引かれているものではなくて、言葉によって引かれたものであるわけです。人が人を「同じ同性愛者の仲間」と呼ぶのは、人が人を「自分たちとは違う同性愛者のやつら」と認識するのは、もともと「同性愛者／異性愛者」の間に線が引かれているからではありません。人が言葉によって線を引いたからです。

そもそも、同じ「同性愛者」という言葉ですら、人によって線引きが違っていきますよね。いったいどういうことなのか、次の会話文で考えてみましょうか。

① 「今まで言えなかったけど、俺、同性愛者なんだ。今度、親に彼氏を紹介するつもり」

② 「えーっ！ 同性愛者だったの!? 俺のことそういう目で見ないでよ（笑）」

③ 「あいつ、彼氏がいるんだってさ……実は同性愛者だったんだね」

④ 「えっ？ でも、前は女と付き合ってたんだから、同性愛者じゃなくてバイビヤね？」

⑤ 「同性愛者かどうかを決めるのは、まわりじゃなくて本人でしょ。好きになったのがたまたま同性だっただけ、って人もいるんだし」

このとき、それぞれの人物にとって、「同性愛者」という言葉はこういう意味になりますね。

- ① 「同性愛者」とは、同性のうち特定の誰かを恋愛対象にする人のこと。
- ② 「同性愛者」とは、同性ならば誰でも性欲の対象にする人のこと。
- ③ 「同性愛者」とは、現在、同性と付き合っている状態の人のこと。
- ④ 「同性愛者」とは、過去、同性とだけ付き合ってきた経験をしている人のこと。
- ⑤ 「同性愛者」とは、状態・経験にかかわらず、自分自身を同性愛者だと思う人のこと。

この中のどれが正しいのか、ということ論じるのはこの本の目的ではありません。むしろ、ひとりとして同じではない人間が、いったいどうして、そしてどんなふうに「同性愛を診断」し「同性愛者を区別」しようとしてきたのかという、根本的なところを考えていきたいのです。

ということで、まずは、「同性愛者／異性愛者」という分類が決して絶対的なものではないということをお話してまいりました。ご紹介した「男性愛者／女性愛者」をはじめ、時代・地域・言語・ものの見方によつて分類はまったく変わってきます。続いてはそれらのような、人間を「同性愛者」と「それ以外」に区切っていないさまざまな分類の数々を見ていきましょう。

「同性愛者」以外の分類いろいろ

少なくとも二〇一五年の日本では、「同性愛者」という分類が存在すると考えられている社会状況であるようです。たとえば二〇一五年四月には、法務省により、「あなたが なたらしく生きるために 性的マイノリティと人権」と題する啓発動画がYouTubeで公開されました²。その中には、自分が同性愛者であることを隠して企業で働く男性を主人公に

したドラマも含まれています。ほかに、著名人が同性愛者だとカミングアウトした、なんてニュースを見かけることがありますし、国立国会図書館には「同性愛者」という言葉を含む資料が二〇一五年刊行のものだけで十七点所蔵されています（二〇一五年十一月調べ）。

ですが、こうして人間を「同性愛者」と「それ以外」に区切ることが当たり前ではないということは、今までお話してきたとおりです。さまざまな時代、さまざまな文化圏において、現代日本で言うところの「同性愛者」が「同性愛者」と呼ばれずどのようなものかということ、ひとつひとつ見ていってみましょう。

同性愛者に名前がなかった場所

シワ・オアシス（エジプト）

アフリカ大陸の北の砂漠、かつてはリビア領で現在はエジプト領となっている地域に、シワと呼ばれるオアシスがあります。そこに住む人々の間では、かつて、男性同士の性行為を伴う関係が当たり前のものとされていたといいます。一九七七年に日本で刊行された

書籍には、シワ・オアシスの人々についてこう書かれています。

「穀類の栽培と牧畜で生計をたてる北アフリカの小部族、シワン（Sivan）族は、男色行為をあらゆる成人男子、青少年にとって当然な習慣とみなし、男女両性と性関係を持たない男子を変人扱いする。」^③

シワ・オアシスにおいて、少なくとも文献に見られる限りでは、「同性愛者」に相当する概念が存在しませんでした。現代日本で言うところの「同性愛者」を特別視せず、むしろ男性と性関係を持たない男性のほうが珍しいとされたために、あえて「同性愛者」というような言葉が必要とされなかったのでしょうか。

しかしこの習慣は、現在ではなかったことにされているようです。各地の先住民族の文化保護を訴えるアメリカの団体、カルチュラル・サバイバルは、「シワ出身の人類学者がこの習慣について英語で自著に書いたところ、シワの人々から圧力を受けて該当部分を削除させられた」としています^④。このことを報じる記事には、シワの住民のコメントとしてこう書かれています。

「私たちのところは、動物園じゃないんだ……シワ・オアシスの中だけにとどめておくべきこともある」

シワ語を話すシワの人々の間でのことが、英語や日本語といった外国語で語られる時、この習慣はやはり「同性愛者 (Homosexual)」とか「同性愛」といった言葉を使って説明されてしまうわけです。名前すらなかったと思われる当然のことに、外から名前が付けられてしまう。これは、自分たちのことを同性愛者だとは思っていないシワの人々に「同性愛者」のレッテルを貼ることにつながりかねません。

シワ・オアシスの人々の間で続いていた男性同士の結婚式は、一九二八年、当時のエジプト王フアード一世の来訪によつて禁止されました。その後シワ・オアシスの中だけでこの習慣は続けられたそうですが、第二次世界大戦を機にアラブ連盟が結成された一九四〇年代を最後に、この習慣は途絶えたとのことです。

女学生どうしの性教育

マミーベイビー (レソト王国)

アフリカ南部、レソト王国の女性たちの間には、「マミーベイビー」という習慣がありました。未婚の女子学生が、ほかの女子学生を特定の相手として選び、それぞれ「マミ

「『ベイベー』と呼び合って過ごすというものです。彼女たちは、勉強や生活全般で支えあうにとどまらず、プレゼントを贈りあったり、同じ学校に通っていてもあえて文通をしたりして心を通わせます。その関係はいわゆる恋愛関係にも似ており、キス、ハグ、また性行為にも及ぶことがあるといえます。マミーとベイベーの間には一般的に数年の年齢差があり、年上の女性が「マミー」、年下の女性が「ベイベー」となるのです。

これには、しっかりとした教育的意図があります。レソト王国では、母親が娘に性的な話をすることはタブーとされているため、母親に代わってマミーが性教育の役目を担^{にな}うというわけです。

マミーとベイベーの間には、日本の先輩・後輩関係を厳しくしたような上下関係があります。たとえば、年下かつ目下であるベイベーの方から、年上かつ目上であるマミーに会いに行くことは失礼に当たるとされます。ベイベーはマミーの意思を優先し、マミーの方からの誘いを待たなければなりません。

中には、複数のベイベーの面倒を同時に見ているマミーもあり、こういう場合も浮気扱いはされません。ただ、同じマミーを持つベイベー同士がやきもちを焼いてケンカしたりすることはあるようです。

彼女たちには、自分たちが「レズビアン」だとか「同性愛者」だとかいう意識はありません。現地で話されるソト語では、このように女性同士の絆をきずな育む女性たち自身を指して特定の名前を付けるというより、その関係性のほうに着目して「ho ratana（ひとを愛する）」とか「Lechako（共に行くこと）」と呼びます。マミーベイビー関係は、男性との結婚後も続いていく場合が珍しくなく、その場合も夫婦関係とマミーベイビー関係を平和に両立させていくのだそうです。

ということ、同性愛者という名前がそもそも必要とされなかった社会の例をふたつ見てきました。現代日本では、同性愛者が「性的少数者」と表現される人々の中の一員として数えられ、いわゆる異性愛者と比べて数が少ないものと考えられています。しかしながら、誰が多数派になるかということは、どういう基準で人を数えるかによって変わるわけです。そのことは、先に述べた「男性愛者／女性愛者」の例からおわかりいただけると思います。

また、シワ・オアシスやレソト王国の例からわかるのは、「社会によって“ふつう”は違う」ということでしょう。同性愛者という言葉は、あくまで西欧から輸入され、現代日本

社会の価値観に基づいて使われている言葉です。かつてのシワ・オアシスにいた男性どうしの夫^{ふう}夫^{ふう}たちやレソト王国のマミーベイビーたちを、日本語で「同性愛者」と呼ぶ行為は、物事の区別の仕方を押し付ける行為にほかならず、まるでイタリアのパスタを「うどん」って呼ぶようなものです。「だって、結局同じ性別でくつついてるんでしょ？」と食い下がるとは、「だって、結局同じ小麦粉でできてるんでしょ？」というくらい乱暴なやりかたです。

現代にも、「同性愛者」という概念を外から輸入して名乗ることを拒否し、自らの文化圏における名前を名乗っている人々が存在します。そういった実例を、続いてふたつご紹介しましょう。

男女ふたつの魂を持つ

トウ・スピリット（北アメリカ）

北アメリカの先住民族は、男女ふたつの魂を持つと考えられた人のことを「トウ・スピリット」と呼んできました^⑧。具体的には、日によって男性の服装をしたり女性の服装

をしたりする人や、男性の身体をもって女性のようにふるまう人のことなどを指しています。トゥー・スピリットの人々は、同性・異性を問わずパートナーを持つこともありましたが、たとえば女性の身体をもつトゥー・スピリットが女性と結婚した場合、また男性の身体をもつトゥー・スピリットが男性と結婚した場合、そのどちらも「同性愛者」と呼ばれることはありませんでした。「同性愛者／同性愛者でない者」という線引きではなく、「トゥー・スピリット／トゥー・スピリットでない者」という線引きがなされていたのです。

しかし、先住民族社会の外から来た人類学者たちは、男性の身体を持つトゥー・スピリットのことを「男女ふたつの魂を持つ者」だとは信じず、自分たちの言葉で「ベルダーシュ」という名前を付けました。この言葉は日本語で言えば、「売春野郎」とか「オカマ」などといった意味を持っており、否定的な響きのある言葉です。

現代に生きるトゥー・スピリットの人々は、「ベルダーシュ」とか「同性愛者」といった言葉を西欧からの押し付けであると考え、「トゥー・スピリット」を名乗ることになります。

SG L (アメリカ)

SG Lとは、社会活動家のクレオ・マナゴ氏が、アメリカにおける同性愛者の権利運動の白人中心主義を批判してつくった言葉です。Same Gender Loving (同じジェンダーを愛する)の頭字語であるこの言葉は、いわゆる同性愛を黒人文化の中でポジティブにとらえる表現です。クレオ・マナゴ氏は二〇一二年、アフロ・アメリカン新聞が運営するウェブメディア^①で次のように述べています。

「(白人同性愛者による権利団体は)彼らの活動を『新しい公民権運動』と呼び、そして、まったく間違った失礼極まりないことを言う。たとえば、『Gay is the new Black (ゲイは新しい黒人である)』、というような」

この「ゲイは新しい黒人である」というフレーズは、「かつてアメリカで差別されていた黒人が社会的権利を獲得したように、次は同性愛者が社会的権利を獲得するのだ」という

ような意味合いで使われています。しかし、こうして白人のゲイによって黒人の社会運動の歴史が利用されることを、マナゴ氏は同じ記事で「ハイジャックされたようだ」と表現しています。

もちろん、すべての黒人同性愛者（とされる人々）がこう感じているわけではありません。たとえば、二〇〇〇年にアメリカで行われた黒人同性愛者のイベント「ブラック・ゲイ・フェスティバル」では、一三五七名の調査対象者のうち、65・8%が自分のことを「ゲイ」だと答えたそうです¹⁰。自分が「SGL」であると答えた人の割合は、10・2%でした。

ただ、白人文化の中で生まれた「ゲイ」とか「レズビアン」とか「同性愛者」といった言葉しか選べないよりは、黒人文化の中で生まれた「SGL」という言葉を名乗れる選択肢をつくらう、ということでは広まった言葉であるようです。

トゥー・スピリット、そしてSGLと、「同性愛者」と名乗らされることを拒否するふたつの例をご紹介します。また先にご紹介したシワ・オアシスやレソト王国のように、そもそも同性愛者という名前が必要とされなかった社会の例もありますね。

しかしながら、本書を執筆している現在の国際社会で圧倒的に優勢なのは、やはり一部の人々を「同性愛者」と呼んで区別する考え方でしょう。ホワイトハウスはLGBT特設ページを設け、その中でレズビアン・ゲイの権利について書いています。国連もまた、同性愛者に対する迫害を人権問題として訴えており、国連広報センターは日本語でも「なぞなぞ…同性愛嫌悪に対する国連からのメッセージ」と題された動画を公開していますへり。それではいいたい、どうしてこのような社会状況となったのでしょうか。どうして今あなたは『同性愛は「病氣」なの?』と題されたこの本を読んでくださったって、どうして今私は本まるごと一冊分の長文で同性愛者という概念について書いているのでしょうか。現代の国際社会において「同性愛者」という分類の仕方がこんなにも広まった背景には、実は、こんな歴史がありました。

ある、男を愛した男の死

「同性愛者」という言葉が生まれたのは、意外に最近のことでした。一八六八年、西欧で交わされた手紙の中でのことです。このとき生まれた「同性愛者」という言葉は、日本語を含む世界中の言語に訳され、百五十年以上の時と九千キロ近い距離を超えて今、このペ

ージにまで書かれています。その背景には、ふたりの人物の強い願いがありました。

ひとりは、ハンガリー人の少年、カール・マリア・ベンケルト。オーストリアで生まれた彼は、その後母国であるハンガリーに帰り、ブダペストの書店で見習いとして働いていました。一八三八年、彼が十四歳の時でした¹²。

そんなある日、ベンケルトの身に、生涯忘れがたい出来事が起こります。友だちだった男性が、たった二十歳で自殺してしまったのです。ただ、一通の手紙だけを残して。

ベンケルトに宛てたその手紙には、このようなことが書かれていました。

「自分は脅されている。金を払わなければ、自分が男性同士で恋愛関係にあったことをバラされてしまう。そんな屈辱には耐えられないし、かといって法に訴えることもできない……」

当時、男性同士の性行為は「自然に反する罪」であるとされていました。もし男性が脅迫を警察に訴え出れば、男性同士で恋愛関係にあったことを知られ、逆に「自然に反する罪」で有罪とされてしまう恐れがあります。それで警察に訴え出られないだろうということまでを見越して、わざと男性を愛する男性ばかりを脅迫するような人々がいたのです。そんな人々に脅され、追い詰められて、ベンケルトの友だちは、永遠にこの世を去って

しまいます。このときペンケルトは、「あらゆる不正義に対して抗^{あらが}おうという本能的な衝動」を感じたのだと語っています⁽²⁾。

やがて時が経ち、少年だったペンケルトは、立派なおひげを生やした大人の男性に成長しました。書店見習いの少年だったペンケルトが闘うために手に取ったのは、剣ではなくて、ペンでした。ペンケルトはヨーロッパを旅し、作家としてのキャリアを歩み始めます。さまざまな国の人々と出会う中、ハンガリー人としての強い自覚から、彼は自分の名前を「カーロイ・マリア・ケルトベニ」というハンガリー風の
名前に改めました。

ケルトベニは、オーストリア生まれのドイツ語力を生かし、ドイツ語圏を旅してまわりながら執筆活動が続けました。また、ハンガリー人としての誇りを胸に、ハンガリー文学を翻訳して広める活動も行っていました。そんな中で彼は、ある人物に出会うことになります。



「ペンケルト」改め、「カーロイ・マリア・ケルトベニ」を名乗るようになった後の肖像。一八六五年ごろの写真と思われる。

カール・ハインリヒ・ウルリヒス。同性愛が「自然に反する罪」であるとされていた当時、同性同士が愛し合う自由を賭けて闘った、ドイツの男性法学者です。

びしっとスーツを着込み、自信にあふれた表情のウルリヒス。彼は、現代日本の言葉で言えば「同性愛者」でした。しかしながらウルリヒスの時代には、まだ「同性愛者」という考え方は存在していませんでした。世の中

には、「同性愛者」などという人間はいない——すなわち、人間はみな異性と生殖のための性行為をするように生まれついており、それにもかかわらず生殖を目的としない性行為を行うのは単なる犯罪行為だ、と考えられていたのです。

当時の法律、プロイセン刑法の第一四三条にはこう書かれています。

自然に反する性行為は、男性同士のものであるにしても、人間と動物の間のものであるにしても、六か月間から四年間の禁固刑、さらには市民権の剥奪をもって処罰



カール・ハインリヒ・ウルリヒスの肖像画写真。世界初の「カミングアウト」をした人物ではと言われている。

する。

ご覧の通り、男性同士の性行為と猥^{じゆうかん}姦とがまとめて「自然に反する性行為」と呼ばれ、犯罪扱いされています。

「じゃあ女性同士ならいいの？」って突っ込みたくなっていますが、そういうわけでもないようでした。たとえば一七二一年には、カタリーナ・マルガレータ・リンク（※リンクンとする資料も）という当時二十七歳の女性が、家庭外では男性を装って二十二歳の女性と結婚生活を送っていたところを見つかり、死刑にされています^{〔13〕}^{〔14〕}。現代日本の言葉で言う同性愛者は、「本来なら異性と愛し合うのが自然なのに、それに逆らう犯罪者である」と考えられていたのです。ベンケルト（ケルトベニ）の友だちが恐喝され、自殺に追いやられてしまったのも、こうした社会状況が引き起こした悲劇でした。

そこに、ウルリヒスは立ち向かっていきました。「人間は全員異性と愛し合うのが自然だ」という当時の常識に、こんな反論をしてかかったのです。

「同性と愛し合うよう生まれつく人間だっている！」

一八八四年、ウルリヒスは、自らの考えを「男性間の性愛についての人類学的研究」という論文にまとめ発表します¹⁵。自分と家族の身に危険がおよばないよう、ヌマ・ヌマンティウス (Numa Numantius) というペンネームで素性を隠して。

その論文の中でウルリヒスは、現代日本でよく言われるところの「心の性・体の性」というような考え方を提示しました。つまり、「人間には男の体と女の心を持って生まれる人もいて、そういう人々にとって男に恋をすることはまったく自然なことだ」と彼は言うのです。

おそらくこの「男の体に女の心」という表現は、ウルリヒスが自分自身のことを説明しようとしたものでしょう。ウルリヒス自身もまた、子どものころは女の子と遊ぶのが好きで、「女の子になりたい」と言っていたようです¹⁶。やがて大人になったウルリヒスは、(資料でわかる限りでは) ひげを生やして男性名を名乗っています。男として生き、女のように恋をする。そんな自分のあり方を、ウルリヒスは「男の体に女の心」と表現したわけですね。

異性愛がふつうで、男性同士の性行為が「自然に反する罪」だとされる中、ウルリヒス

はなんとか「自分が男性に惹かれるのは自然なことだ」と訴えようとしたのでしょうか。ということでウルリヒスは、自分自身をふりかえり、「男の体に女の心を持って生まれつく人間」という発想にたどりついたのですね。

しかしながらウルリヒスは、やがて自身の間違いに気づいていくことになります。多くの人々との出会いの中で、「男と恋する男が女の心を持っているとは限らない」ということを実感したのです。

「自分みたいに女っぽいわけじゃなくても、男と恋する男はいるんだな」

「女っぽい女同士で付き合う人や、男とも女とも付き合う人もいるんだな」

十人十色のありようを前に、ウルリヒスは「男性同性愛者Ⅱ男の体に女の心」という自分の主張を改めざるをえませんでした。

ともあれ、法学者であったウルリヒスの主目的は、男性同士の性行為を「自然に反する罪」と呼ぶプロイセン刑法第一四三条を改めること。ウルリヒスは、「同性を愛するように生まれつく人もいる」という発想からは離れないまま、人間を次のように分類していきます。

ウルニング……同性愛者

ウラノディオニング……両性愛者

ディオニング……異性愛者

※以上は、すべて男性を指す表現。ドイツ語には男性形と女性形があるため、女性の場合はそれぞれウルニンギン／ウラノディオニンギン／ディオニンギンとなります。

なんだかモンスターの名前か何かみたいですが、これらは実は由緒正しきギリシャ神話由来。切り取られた男性器から愛の女神を誕生させた天空神・ウラノスになぞらえて、男性同性愛者を「ウルニング（ウラノスの子ども）」と呼んだのです。

勢いづいたウルリヒスは、ある決意をします。逃げも隠れもせず、堂々と人前に出て、カミングアウトして自分の考えを話そう、と……。同性愛が「自然に反する罪」と呼ばれた時代に、同性を愛するよう生まれついたウルニングたちの存在を、彼は自分の身をもつて知らしめようとしたのです。

ウルリヒスは決意を胸に、ウルニングたちの存在を訴える論文を書き上げました。その

論文にはもはや、「ヌマ・ヌマンティウス」という偽名は使われていませんでした。カー
ル・ハインリヒ・ウルリヒスという、彼自身の本当の名前で書かれた論文を、ウルリヒス
は自分自身の声で発表すべく、ミュンヘンでのドイツ法学会に向かいました。一八六七年
八月二十九日。それは、夏の終わり、彼が四十二歳の誕生日を迎えた翌日のことでした¹⁷。

「『自然に反する罪』などない！ 刑法第一四三条を撤廃すべきだ！ われらウルニン
グにとって、同性を愛することは生まれつきの自然なことなのだ！」

学会の論壇に立ち、熱く訴えるウルリヒス。しかし、聴衆たちは彼を笑い、からかい、
ヤジを飛ばしてバカにしました。それでも演説をやめようとしないうルリヒスは、ついに
怒鳴りつけられ、最後まで話をするこゝす^{どせい}ら許されませんでした¹⁸。こうして、ウルリヒ
スの勇気あるカミングアウトは、怒声^{どせい}と嘲笑^{ちやうしょう}にかき消されてしまったのです。

そんな彼のことを、ちゃんと見ている人がいました。ケルトベニです。子どものころ、
大事な友だちを自殺に追いやられ、同性愛を『自然に反する罪』とする刑法一四三条と闘
おうと誓った、あのケルトベニはウルリヒスのことをちゃんと見ていたのです。頑固者で

正義感の強いウルリヒスは、同性愛だけでなく宗教的マイノリティや女性の権利のためにも闘い、警察に捕まって牢屋ろうやに入れられたりすることもあったそうです。そんな彼の不器用な姿を、不正義と闘うべく作家になったケルトベニは、「自分とは違うタイプだけど同じ志を感じるなあ」というような思いで見えていたのでしょうか。

それからのことでした。「同性愛者」という言葉が生まれる、歴史的な瞬間がやってきたのは。

「同性愛者」というカテゴリーの誕生

一八六八年五月六日、ケルトベニはウルリヒスに宛てて手紙を書きます。ウルリヒスが「ウルニング」だなんてちよつとカッコよすぎる名前前で同性愛者を呼んでいたのに対し、ケルトベニはもうちよつとシンプルな言葉づかいをしてみせました。ギリシャ語で「同じ」を意味する「ホモ (Homo)」と、ラテン語で「性」を意味する「セクスス (Sexus)」を組み合わせ、「Homosexual (同性愛者)」という言葉をつくり出したのです。さすが、語学に長けた言葉のプロのやることです。同じ要領で、ケルトベニは「Heterosexual (異性愛者)」と

いう言葉もつくりだしてみせました。

続いてケルトベニは、この「同性愛者」という言葉を使い、一八六九年に刑法一四三条反対を表明する文書を發表しました。匿名での發表でしたが、その中には、自殺した友だちを想い「刑法一四三条は恐喝や自殺を誘発する」と書くことを忘れませんでした。これが、文献に残っている限りでは、人類史上はじめて「Homosexual (同性愛者)」という言葉が公式に使われた瞬間です¹⁹⁾。

ウルリヒスとケルトベニが声をあげる前には、同性愛者にも異性愛者にも名前がありませんでした。ただ、人間はみんな「異性を愛する人たち」とされ、たまに「自然に反する罪」を犯す、と考えられただけだったのです。

ですが、そんな常識にウルリヒスとケルトベニが挑戦していく中で、「同性愛者／異性愛者」という概念がやっと生

Continuation an Beschäftigten - Ich dagegen verbrachte dies Leben und
Zeit mit unfeindlich, da es nicht mein Will gewesen hätte vorzulegen,
und durch persönliche Bedrohung gezwungen zu werden, mich auch noch
mit jüdischen Grundsatzen beschäftigen zu müssen - mit der
Studien der legislativen, wie juristischen Grundsätze, sowie
aller bestehenden Gesetzbücher, bespreche auch die Frage umgekehrt
mit gewissen Büchern der Staats- wie Rechtslehre, und habe überdies
die naturwissenschaftliche, anthropologische wie historische Seite der
Frage gründlich erschöpft, und in einem eigen denken Hauptbegriffen
- das die noch nicht kamen, und das in vier Hauptabteilungen
zerfällt: Homosexual, Homosexual, Heterosexual, und Heterogenität.
Nur bei mir der allgemeine Vortheil ward, hier einen der wichtigsten
selbst geschätzten, der Wiener Universitätshalle entsprossenen, aber
hier geborenen, und hier stehende Praxis ausübenden Arzt vor sich
gebracht zu haben, der lebhaftes Interesse an solcher Forschungen
nimmt, mit dem ich alles besprechen kann, oder mir schon die
merkenswerten Fälle theils schon liest, theils theoretiisch analysierte.

ハンガリー国立セーチャーニ図書館所蔵、ケルトベニがウルリヒスに宛てた手紙。中央のハイライトされた部分に「Homosexual」とある

まれてきました。もともと、頑固なウルリヒスのほうは、ケルトベニが「同性愛者／異性愛者」と書くのを無視して意地でも「ウルニング／ディオニング」と呼びたがっていたようです。

さて、こうして「同性愛者／異性愛者」という境界線が生まれはしたものの、ケルトベニには、ある悪い予感がありました。ウルリヒスが主張する「同性愛は生まれつきのものだ！」とか「自分たちウルニング（同性愛者）は、ディオニング（異性愛者）とは違うカテゴリの人間なんだ！」といった考え方が、また新たな対立を生んでしまうのではないかと危惧きぐしたのです。

「ウルニング（同性愛者）はディオニング（異性愛者）とは違うのだ」と訴えるウルリヒスとは対照的に、ケルトベニは、「あくまで同性愛者も異性愛者もみんな同じ人間だ」という立場に立っていました。同じ刑法一四三条反対派であっても、ウルリヒスは「生まれつきなんだから罰するべきじゃない」、ケルトベニは「お互い合意のことで他人に迷惑をかけていないんだから罰するべきじゃない」という考え方の違いがあったわけですね。たとえばケルトベニは、このように述べています。

「(同性愛者が) 生まれつきだと証明すること……それは危険な、諸刃の剣もろは つるぎである。(中略) 生まれつきのものであるか否かに関係なく、十四歳以上の個人が双方同意の上で行うことに、国家はそもそも介入する権利がないのだ。それがプライベートルなことであり、第三者の権利を侵害しないかぎりは」²⁰

「生まれつきのことだから罰するべきではない」という論理にしてしまうと、生まれつきではない人たちが守られなくなってしまう。それに、生まれつきの人たちを見下みくだすような視点も出てきかねませんし、同性愛が生まれつきであるという証拠探しも始まってしまいます。「われらウルニング(男性同性愛者)は、生まれつき男の体と女の心を持っていますのだ」——そう述べるウルリヒスの理論を、ケルトベニは「諸刃の剣」だと言いました。おそらく、この理論が引き起こす、「同性愛者は生まれつき劣った存在だ」とか「生まれつきの同性愛者じゃなければ偽物だ」とでもいうような偏見を予感していたのでしょうか。

そして一八七一年、ウルリヒスとケルトベニに残酷な現実が突きつけられます。彼らが必死に抗ってきた刑法一四三条は、ドイツ帝国建国にともない、ドイツ刑法典に刑法一七

五条としてそのまま引き継がれてしまったのです。

第二七五条 自然に反する淫行

自然に反する性行為は、男性同士のものであるにしても、人間と動物の間のものであるにしても、六か月間から四年間の禁固刑、さらには市民権の剝奪をもって処罰する。

ケルトベニは祖国ハンガリーに戻り、五十八歳の若さで生涯を終えました。ウルリヒスもまた、病に苦しみながらイタリアへ亡命し、二度と故郷には戻れぬまま六十九歳でこの世を去ります。

ついに果たされなかった、同性愛非犯罪化という夢。タイミングの悪いことに、世は帝国主義の時代でしたから、「同性愛は自然に反する罪だ!」という考え方はドイツ帝国の勢力に乗って広まっていつてしまします。西のフランス、北のデンマーク、東のポーランドといった国々の一部までが、同性愛を犯罪とする刑法一七五条の支配下に置かれました。加えて、直接ドイツ帝国の勢力下にあったわけではないものの、イギリス帝国もまた同性

愛犯罪化の流れを広めていきました。遠く離れた日本でも、一八七三年に「鶏姦罪」という名前で男性同士の性交が犯罪化されています。

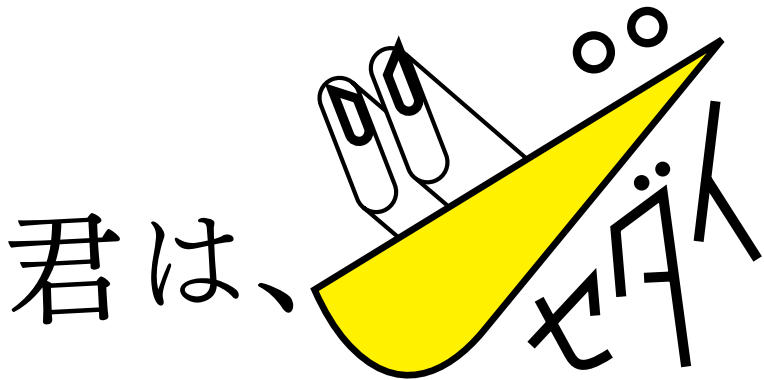
恐喝され、密告され、嘲笑され、投獄され、職を失い、家族を失い、故郷を追われ、そして、生きる場所をなくしていく――。ウルリヒスが、そしてケルトベニが守ろうとした人々は、刑法一七五条のもと、終わらない悪夢に苦しむことになりました。その中には、自ら命を絶ってしまった人々も少なくなかったことでしょう。同性愛をバラすと恐喝され、法に訴えることすらできずに自殺した、あの日のケルトベニの友だちのように。

だけれどもウルリヒスとケルトベニは、後世の人々に武器を遺してのこいきました。

百五十年後の今も残る、「同性愛者」というこの言葉を。

かつてケルトベニが諸刃の剣と呼んだ、「同性愛者」という概念を。

この言葉の剣が後世の人々によってどう使われ、そしてどんなものを切り拓ひらいていったかは、第2章に続くお話です。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

会いに行ける編集長

毎週「つながる」毎月「会いに行ける」。新書出版を目指
す新人と編集者による「知の格闘」を生放送！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!